

【研究ノート】

高校生の地元・都会に対する意識と親の家族実践 —鳥根県の親子ペアデータの分析から—

片岡佳美・吹野 卓
(鳥根大学法文学部)

摘 要

鳥根県のような地方においては、大学進学を機とする若年層の人口流出が著しい。それは、県内に進学先が少ないためであるが、親が日常的なやりとりを通して、子どもを都会の大学に進学するように誘導し、県外流出を熱心に誘導しているとも言えるのではないか。そこで本稿では、2019年に県内の高校3年生とその保護者を対象に実施した調査票調査の親子ペアデータを分析した。その結果、親の家族実践が子の都会志向／ふるさと志向を左右していることを確認した。

キーワード：鳥根県、若年層人口流出、家族実践

1. はじめに

鳥根県の人口は、昭和61年から34年連続して減少してきている。少子化も大きく影響しているが、若年層——年齢（5歳階級）別に見ると、とくに15～19歳、20～24歳——で県内転入者が県外転出者を大きく上回り、その後もその大部分が県内に戻らないという傾向が続いている（鳥根県政策企画局統計調査課，2020）。若年層の県外転出の理由としては、統計上は「就職」が最も多い。しかし、2019年学校基本調査によれば、大学・短大進学者のうち県外に出た者は84.0%となっている。また、筆者らが勤める大学の学生たちを見ても、県外進学しても就職するまで住民票の住所を移動しないケースは多いと考えられ、こうした人たちが統計には表れていない可能性がある。これらから、実際には地方の若年層流出は、高校卒業後の県外進学から始まっていると言ってよいだろう。

県外進学理由は、県内に進学先が少ないためであるが、それに加えて、どうしても都会の大学に行かなければならないと生徒らを強く導くものがあるからではないか。筆者の一人、片岡は親の働きかけに注目し、鳥根県で、高校生の子どもに県外進学させたいと考えている、あるいは実際に県外進学させた親を対象にインタビュー調査を行なった。その結果から、親が親としてふるまえばふるまうほど、子どもは早々に県外に出て行くよう仕向けられていくことを示唆した。調査対象の親たちは、「親はわが子のために尽くすもの」という近代家族の規範、そして競争社会の文化を強く内面化しており、「子どもには広い世界を学ばせなければ」と、わが子のために習い事や文化体験など、費用も労力も惜しまず与えてきた。その延長線上に県外の大学進学があった。そのような頑張りとは、かれらにとって「親として当然」のことであり、

また「親」であるためにも必要なことであり、事実かれらは、それに一所懸命だったときに最も家族生活が充実していたという。ただし、それは、子が県外進学したところで「目標達成」となり、そこから先の目標は不明確であった。つまり、これらの親にとって「親をすること」とは、まさに「子を県外に出すこと」そのものであったことがうかがえた(片岡, 2020)。

このようなことをふまえると、若年層人口の県外流出のメカニズムを解明するためには、親の働きかけとそれに対する子どもの反応といった、親子間の相互作用に注目する必要があると考える。そこで今回、鳥根県の高校生とその保護者をペアで対象にした質問紙調査を実施し、その相互作用の効果について量的に把握したいと考えた。本稿は、その分析結果について議論することを目的とする。

なお、同調査データの分析は吹野・片岡(2020)においても行なったが、今回は、親の家族実践の影響にとくに注目した分析を行なう。

2. これまでの研究

2.1 家族実践という視点

家族実践とは、イギリスの家族社会学者デイヴィッド・モーガンが提唱する、家族を論ずるための分析視角である(Morgan, 2011=2017)。

以前は、家族を議論するときは、「孤立した核家族」「家族成員相互の愛情の重視」「異性愛カップル」など、いわゆる近代家族モデルが暗黙の了解となっていた。しかし、近年、家族の多様化が強調されるようになり、家族については、「家族とはこういうものだ」と特定のモデルに当てはめて捉えるのではなく、個人の選択によるものとして、当事者から見てどうかという点から議論すべきという立場が、家族社会学では主流となってきた。家族実践というアプローチも、個々の当事者という視点を重視した家族論として登場したものの一つである。

家族実践とは、個人が「家族である」がゆえに行なって当たり前とその人が思っていることを行なうことである。それらはその社会の規範に規定されるが、その人が接している文化や、その人の置かれている状況などに応じ、その人が選択していくものなので、当然多様性も認められる(Cheal, 2002=2006)。個人はそれを、家族成員として認知する人たちに向けて(あるいは家族外にアピールするときは第三者に向けて)、日々行なっている。そうした実践が家族実践であり、その実践が家族成員とやりとりされ、続けられることで、かれらは「家族になる」。したがって、家族実践というアプローチでは、個々の人びとが家族として何をしているか、という点から家族を論ずるということになる。

さて、本稿では、現代家族がどうなっているかという議論を展開するためというよりは、地方の若年層人口流出問題を議論するために「家族実践」に注目する。ここでは、親が家族として・親として、あるいは家族になるために・親になるために、行なっていることが、子にはどのように受け止められ、それが子の県外流出あるいは県内定住にどのように影響していくのか、という点を問う。

2.2 親の影響について

親が子に対して何をしているのかという問いについては、これまでも「社会化」研究や「教育する家族」研究で、追究されてきた。これらの研究は、近代家族モデルの浸透とともに、親から子への教育的関与が強まったということを示してきた(中澤・余田, 2014)。そして、教育に積極的に関与する親への注目は、子が親から受ける影響についての調査研究を発展させた。

とりわけ、親の社会・経済的地位が、子の教育達成度(学歴)に影響するということを明らかにし、階層の再生産を論ずる研究は数多く見られる。それらのなかには、地方においては、経済的に恵まれた家庭の子ほど東京圏へ移動し、高い教育を受け、高所得を得るという階層再生産が存在することを、調査データで明らかにした研究もある(李, 2012)。地方の若年層人口の流出が、階層再生産というかたちを取って促進されていることがうかがえる。

また、子の性別によって、親の子に対する期待が異なることを示した研究もある。石川らは、子が男子の場合、子の年齢が上がるにつれ、母親の業績志向と性役割志向の相関が強くなることを示した(石川ほか, 2004)。さらに片瀬は、親子間の価値意識の伝達に関して、高校2年生とその父母を対象にした調査結果から、女子では強く見られるが男子では明確に見られないことを示した(片瀬, 2002)。親による社会化効果が子の性別によって違ってくるというのは、地方の人口流出問題を考えるうえでも注目すべき点であろう。18~23歳の鳥根県の県外転出者数(2018年10月1日~2019年9月30日の数値)は、男性が1,989人、女性1,829人で、男性のほうが多い(鳥根県政策企画局統計調査課, 2020)。この差が、親の社会化効果によるものである可能性も考えられる。

いずれにせよ、廣嶋が言うように、家族が「地域人口をつくりだす主体」であることは明らかである(廣嶋, 2016)。では、その「地域人口をつくる主体」である家族がどのように動いて、地方の若年層の人口移動を生ずるのか。子が、親との相互作用の中で早期の県外流出を選択しているのなら、その相互作用の中身を分析することは重要である。

3. 調査

上述の考えから、2019年9月、鳥根県松江市内の3つの県立高校(普通科)の3年生全員とその保護者を対象に、調査票調査を行なった。回答票は親子ペアで回収したため、親の回答と子の回答の関連について検討することが可能である。調査票は、高校を通じて配布し回収したため回答の回収率は高く、有効回答数(親子ペアで回収)は512ケースであった(有効回収率70.1%)。

子の調査票は、性別、都会や地元に対する意識、親のことや将来についての意識についての質問項目からなる。一方、親の質問紙は、性別、4年制大学を卒業した(または、在学中の)家族成員、子育てする中で力を入れてきたこと(家族実践)についての質問項目、わが子の将来の幸せにとって重要なことについての質問項目からなる。

なお、親の回答は、8割以上が女性、つまり母親であった。

4. 結果

親の家族実践については、子育てする中で回答者(親)が何に力を入れてきたかを問うた項目から捉える。5項目あり、それらと子の性別との関係を見たのが表1である。これは、5つの家族実践についてそれぞれ「積極的にしてきた」に4点、「わりとしてきた」に3点、「あまりしてこなかった」に2点、「全然してこなかった」に1点を配点したときの、性別平均を示している。

「子どもの悩みの相談に乗り、助言する」(女子の平均がより高い)以外、男女間で有意差は認められない。特徴的なのは、「子どもの部活動を重要視する」の平均がより高い点である。子が部活に打ち込むことはよいことだし、親も協力し支援するという家族実践が、多くの親に取り入れられてきたということがうかがえる。

表1 親が「子育てする中で力を入れてきたこと」の平均得点(子の性別比較)

家族実践	生徒性別		t 値
	女 (n=283)	男 (n=223)	
島根の海や山などの大自然を親子で楽しむ	2.70	2.76	-0.89
子どもが外国への関心を高めるよう導く	2.20	2.10	1.44
子どもの悩みの相談に乗り、助言する	3.13	2.97	2.58 *
家庭の経済状況について親子で話をする	2.77	2.72	0.76
子どもの部活動を重要視する	3.22	3.26	-0.68

* : P<.05

次いで、親の価値観を捉えるものとして、親が思う「わが子の将来の幸せにとって重要なこと」を問うた10項目について、それぞれ「とても重要」に5点、「やや重要」に4点、「どちらとも言えない」に3点、「あまり重要でない」に2点、「まったく重要でない」に1点を配点し、子の性別でその平均を比較した。結果は表2の通りである。

表2 親が思う「わが子の将来の幸せにとって重要なこと」(価値観)の平均得点(子の性別比較)

	女	男	t
就職活動のために、資格や免許を取っておくこと	4.40	4.22	2.60 **
都会の有名な大学に入ること	2.51	2.66	-1.82
公務員や大企業など、収入や地位が安定した仕事に就くこと	3.34	3.50	-1.96
親(あなた)と一緒に、または近所で暮らすこと	2.69	2.64	0.56
地元定住にこだわらず、もっと広い世界に出てがんばること	3.57	3.56	0.15
たとえ収入が不安定になっても、自分のしたいことや夢を追求すること	3.12	3.17	-0.66
進学や就職で一度は県外に出たとしても、いずれはふるさとに戻ってくること	2.94	2.84	1.16
さまざまな価値や文化と接し、視野を広げること	4.43	4.37	0.99
都会で大成し、一角の人物になること	2.11	2.31	-2.65 **
ふるさとに誇りをもって住み続けること	3.05	3.09	-0.43

** : P<.01

有意差が認められたのは、「就職活動のために、資格や免許を取っておくこと」と「都会で大成し、一角の人物になること」のみであった。前者は女子において、後者は男子において、得点がより高くなっている。

親の価値観を示すこれらの10項目で因子分析(主因子法, バリマックス回転)を行なった。その結果を表3に示す。

固有値1以上で4因子が抽出され、ここでは、ふるさとに戻ってくることや住み続けることについての項目との関連が強い第1因子には「故郷で暮らす」、都会で立身することについての項目との関連が強い第2因子には「都会で頑張る」、視野を広げることや自己実現を目指すことについての項目との関連が強い第3因子には「広い世界で」、資格取得や安定収入についての項目との関連が強い第4因子には「安定した職」と名付けた。

表3 親が思う「わが子の将来の幸せにとって重要なこと」(価値観)の因子分析結果(因子負荷量)

	故郷で暮らす	都会で頑張る	広い世界で	安定した職
進学や就職で一度は県外に出たとしても、いずれはふるさとに戻ってくること	0.89	0.03	-0.11	0.11
ふるさとに誇りをもって住み続けること	0.78	-0.02	0.04	0.07
親(あなた)と一緒に、または近所で暮らすこと	0.71	0.15	-0.24	0.17
都会の有名な大学に入ること	-0.13	0.70	0.03	0.18
都会で大成し、一角の人物になること	0.20	0.69	0.07	-0.01
地元定住にこだわらず、もっと広い世界に出てがんばること	-0.32	0.25	0.61	-0.06
さまざまな価値や文化と接し、視野を広げること	0.02	-0.09	0.60	0.14
たとえ収入が不安定になっても、自分のしたいことや夢を追求すること	-0.07	0.05	0.32	-0.31
就職活動のために、資格や免許を取っておくこと	0.13	0.10	0.17	0.58
公務員や大企業など、収入や地位が安定した仕事に就くこと	0.12	0.49	-0.13	0.56

親が思う「わが子の将来の幸せにとって重要なこと」(価値観)に関する、これらの4因子と、親が「子育てする中で力を入れてきたこと」、すなわち家族実践についての5項目との関係(相関係数)を示したのが表4である。

「故郷で暮らす」因子と有意な関係が認められたのは、「大自然を親子で楽しむ」「部活動を

表4 親の価値観因子と家族実践項目の相関係数

	故郷で暮らす	都会で頑張る	広い世界で	安定した職
鳥根の海や山などの大自然を親子で楽しむ	.09 *	.02	.13 **	.00
子どもが外国への関心を高めるよう導く	-.05	.16 **	.37 **	-.09 *
子どもの悩みの相談に乗り、助言する	.01	.02	.20 **	.10 *
家庭の経済状況について親子で話をする	.02	.05	.10 *	.09 *
子どもの部活動を重要視する	.14 **	.00	.16 **	.07

* P<.05 ** P<.001

重要視する」で、それぞれ正の相関がある。「都会で頑張る」因子は、「外国への関心を高めるよう導く」との間で正の相関が有意と認められた。「広い世界で」因子は、家族実践についての5項目すべてとの間で、正の相関が有意であった。つまり、「広い世界で」因子は、「故郷で暮らす」因子との関係があった家族実践とも、「都会で頑張る」因子と関係があった家族実践とも、有意な相関がある。一方、「安定した職」因子は、「外国への関心を高めるよう導く」との間で負の相関、「相談に乗り、助言する」「家庭の経済状況について親子で話をする」との間で正の相関が有意であった。

今度は、子(生徒)に地元に対する思いや都会に対する思いについて問うた項目について見てみる。これらは、「そう思う」から「そう思わない」の5点尺度で測定しており、肯定するほど高得点になるよう、値には5点から1点までを割り当てた。因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行なった結果、表5のようになった。固有値1以上で2因子が抽出され、「ふるさとに誇り」「育った地域のために何か役立つことをしたい」と強い関連を示す第1因子を「ふるさと志向」、「一度は都会で暮らしたほうがよい」「一度は都会で暮らすことになるだろう」「都会にはあまり魅力を感じない(因子負荷量の符号はマイナス)」と強い関連を示す第2因子を「都会志向」と名付けておく。

表5 子の地元定住、都会への移動に関する項目の因子分析(因子負荷量)

	ふるさと志向	都会志向
自分のふるさとに誇りをもっている	0.79	-0.02
自分が育った地域のために、何か役に立つことをしたい	0.76	-0.17
自分の人生の可能性を広げるために、一度は都会で暮らしたほうがよい	0.05	0.71
高校卒業後、少なくとも一度は都会で暮らすことになるだろう	-0.11	0.64
都会には、あまり魅力を感じない	0.19	-0.53

子の「ふるさと志向」「都会志向」に、親の家族実践はどのように関与しているだろうか。ここでは、とくに、定住・移住と関係する可能性が高いと考えられる「大自然を楽しむ」と「外国への関心を高める」を取り上げてみる。その際、子の性別による違いが表れることを想定し、子の性別ごとに共分散構造分析を行なう。その結果に基づき、パス図を描いたのが図1と図2である。

これらの図で、標準化係数が四角で囲まれているものは、男子生徒・女子生徒の間での係数の違いが5%水準で有意、アンダーラインが引かれているものは10%水準で有意であることを示す。

子の性別による差が有意だった点として、まず、「都会で頑張る」ことが子の幸せだという親の価値観から、「外国への関心を高める」という家族実践へのパスの係数がある。これらの2つの変数間の関係は、女子では有意であるが(親が「都会で頑張る」を肯定するほど、親は「外国への関心を高める」という家族実践に積極的である)、男子ではほとんど関係が見られなかった。

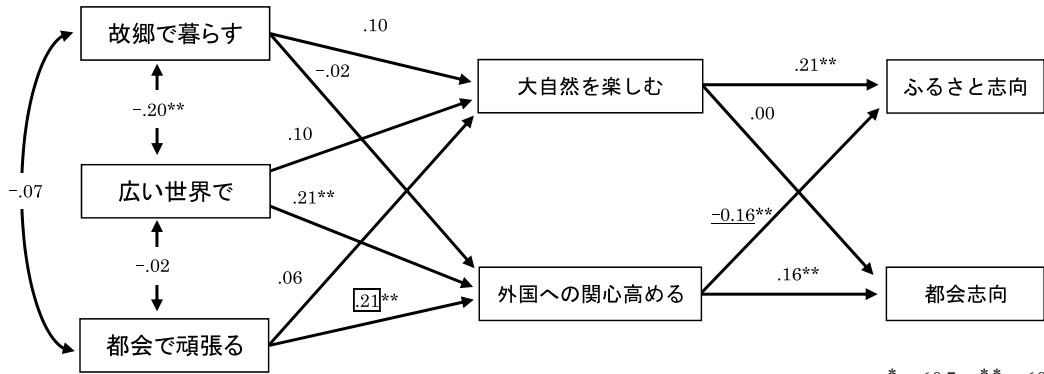


図1 パス図(子の性別=女) n=287

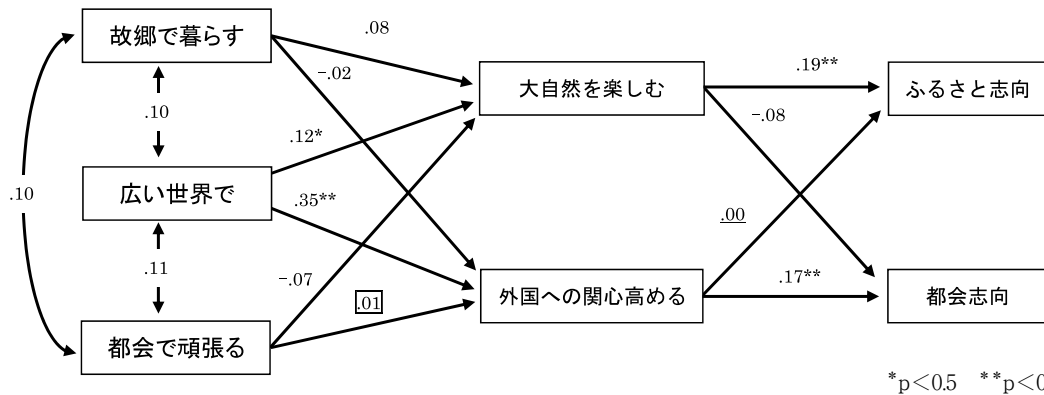


図2 パス図(子の性別=男) n=225

親の「外国への関心高める」という家族実践から子の「ふるさと志向」へのパスの係数についても、男子生徒・女子生徒の間の差が有意であることが示された。女子においては、係数の符号がマイナス、つまり、親が「外国への関心高める」という家族実践に積極的であるほど、子の「ふるさと志向」が低下するという関係が有意であるが、男子では二つの変数間にそういった関係は見られない。

親の家族実践から子のふるさと志向・都会志向への関係を見ると、「大自然を楽しむ」という親の家族実践は子の「ふるさと志向」に、「外国への関心高める」という親の家族実践は子の「都会志向」に関係している。このことは、子の性別にかかわらず言える。また、親の「外国への関心高める」家族実践については、子の幸せにとって「広い世界で」頑張ることが重要だという価値観に由来することが示されている。親が「広い世界で」を重視した場合は、「外国への関心高める」家族実践が積極的になされ、その結果、子が都会に目を向けていくということである。

また、男子の場合、「大自然を楽しむ」という親の家族実践も「広い世界で」という価値観

に由来している。親が「広い世界で」という価値観からどのような家族実践に積極的になるかによって、男子はふるさと志向になったり、都会志向になったりすることがうかがえる。

5. むすびにかえて

表2で見たように、親が子の将来の幸せのために重視することは、ほとんどの項目で子の性別によって変わることはなかったが、「都会で大成し、一角の人物になること」は、女子よりも男子に向けて重視されていた。つまり、親は、立身出世を女子よりも男子に望んでいる。男女平等の教育が浸透し、広い世界を知ることは娘にも息子にも強く願われるのだが、立身出世については男女の問題というより、今も男子の問題であるようだ。

社会的地位を高くするチャンスは都会に集まっているため、立身出世は都会に出ることを意味する。よって、親は、娘よりも息子に都会に出てほしいと願うことになる。男子には女子以上に、都会に出ることが当然視される傾向があることをふまえておきたい。

図1・2では、子の性別にかかわらず、子のふるさと・都会志向が、親が日頃から家族として行なっていること(家族実践)と関係しているということが見出された。親が鳥根の大自然を親子で楽しむという家族実践を積極的にしていると、子は地元を重視するようになる。一方、親が外国への関心を高めるといふ家族実践に熱心であると、子は都会に出ることを考える。

ただし、都会に出ることは息子に対してより強く望まれているため、娘が都会志向になるには、息子以上に親から強い働きかけが必要となる。図1から示唆されるのは、娘がふるさと志向でなく都会志向になるためには、親は、都会で頑張ることが娘の幸せにつながるという価値観をより強くもったうえで、外国への関心を高めるよう導くような家族実践に、より積極的にならなければならないということなのかもしれない。反対に、娘がふるさと志向になるためには、親は息子に対するほどには地元の自然の素晴らしさを体験させるといった家族実践に積極的にならなくても済む。

一方、息子の場合では、親の「子には広い世界を学んでほしい」価値観から、子の都会志向に影響する家族実践だけでなく、子のふるさと志向に影響する家族実践も生じていた。実際、今回の分析で「広い世界で」因子に強く関係していた変数は、「地元定住にこだわらず、もっと広い世界に出てがんばること」「さまざまな価値や文化と接し、視野を広げること」「たとえ収入が不安定になっても、自分のしたいことや夢を追求すること」であった。立身出世が重要だからそのために視野を広げておかないといけないという立場と、立身出世よりも夢へのチャレンジという冒険が大事だという立場の両方が含まれている。つまり、男子の親が「広い世界で」と言うとき、そこには両義性があるということである。

社会経済的地位の安定を目指す立身出世と、そうした地位にこだわらない夢の追求——男子には前者のほうが強く望まれる傾向があるが、後者のような道も、親は「広い世界で」という価値観を変えずに男子に用意できるのかもしれない。つまり、「広い世界で」は、「男らしさ」と重なり合う価値観であるのかもしれない。

以上のことが、今回の分析から見えてきたことである。もちろん、言うまでもなく、親たちが行なっている家族実践は、ここで取り上げた項目だけに限らない。そもそも家族実践とは、

家族を家族たらしめている、家族成員間での日常のさまざまなやりとりであることを思い出すと、大自然を楽しむことや外国に関心を持たせることは、それらの家族実践のうちのほんの些細な部分にすぎない。そうしたことを押さえたいうで本稿で確認しておきたいのは、日常的な親の家族実践が子のふるさと志向や都会志向に影響しているということが示された点である。このことから、ここで取り上げた家族実践をも含む、さまざまな家族実践が、繰り返され積み重なりながら——もちろん、家族外部からの刺激・働きかけも受けながら——、子どもたちは県外に出て行く、あるいは県内に残るといふ人生を考えるようになっていくということ、また、親の家族実践の影響については子のジェンダーも関係するということが、仮説として提示できる。地方の若年層人口移動を考える切り口として、家族実践についてさらに詳細に検討していくことの意義を確認できたと言ってよいだろう。

【付記】

本研究は、下記の研究助成を受けた研究の成果の一部である。科学研究費助成事業「地方の人口問題と家族実践についての調査研究」（基盤研究C・19K02076, 研究代表者：片岡佳美, 2019-2022年度）、鳥根大学山陰研究プロジェクト「住民の生活・生き方から問う「地方」」（研究代表者：片岡佳美, 2018-2020年度）。

【文献】

- Cheal, D., 2002, *Sociology of Family Life*, Palgrave Macmillan (=野々山久也監訳, 2006, 『家族ライフスタイルの社会学』ミネルヴァ書房).
- 吹野卓・片岡佳美, 2020, 「地方の進学希望高校生の転出意識—生徒と保護者のペアデータの分析—」『社会文化論集』16, 1-9.
- 廣嶋清志, 2016, 「地域人口問題と家族研究」『家族社会学研究』28(1), 56-62.
- 石川由香里・杉原名穂子・喜多加実代・中西祐子, 2004, 「現代の親の教育意識と教育行動」『活水論文集』47, 79-107.
- 片岡佳美, 2020, 「親は子どもの県外移住にどのように関与したのか—鳥根県若年層人口流出と家族実践についての—考察—」『ソシオロジ』64(3), 113-129.
- 片瀬一男, 2002, 「価値意識の世代間伝達—家族における社会化の規定要因—」『社会学研究』72, 43-62.
- Morgan, D. H. J., 2011, *Rethinking Family Practices*, Palgrave Macmillan (=野々山久也・片岡佳美訳, 2017, 『家族実践の社会学—標準モデルの幻想から日常生活の現実へ—』北大路書房).
- 中澤智恵・余田翔平, 2014, 「〈家族と教育〉に関する研究動向」『教育社会学研究』95, 171-205.
- 李永俊, 2012, 「地域間移動と格差問題」, 石黒格・李永俊・杉浦裕晃・山口恵子 『「東京」に出る若者たち—仕事・社会関係・地域間格差—』ミネルヴァ書房, 71-87.
- 鳥根県政策企画局統計調査課, 2020, 『令和元年 鳥根の人口移動と推定人口』(<https://pref.shimane-toukei.jp/upload/user/00021104-36A76i.pdf>, 2020年8月14日閲覧).

High School Students' Attitudes toward Hometown/ Urban City and Their Parents' Family Practices: An Analysis Based on Parent-Child Pair Data in Shimane Prefecture

KATAOKA Yoshimi and FUKINO Takashi
(Faculty of Law&Literature, Shimane University)

[A b s t r a c t]

In Shimane Prefecture, the depopulation of young people which results from going on to university is remarkable. It is caused by the fact that there are few universities in the prefecture, but it may also be true that parents encourage their children to leave their hometown to go to university in big cities through the daily parent-child interaction. Therefore, we analyzed the pair data from the survey conducted in 2019 on third-year high school students and their parents. As a result, we found that parents' family practices influenced students' preference for big cities over a preference for the local region.

Keywords: Shimane Prefecture, depopulation of young people, family practices